

聖書:ダニエル書4章1～18節

説教:王の見た夢

はじめに

最初にお詫びをいたします。前回と前々回、バビロンとペルシャを言い間違えていたことに気がつきました。正しくはバビロン帝国ですので訂正します。

南王国ユダはBC605年にバビロン帝国に包囲され、ダニエルと彼の三人の友人たち、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤは補囚の身となって帝国に連れて行かれ、やがてネブカドネツアル王の側近に大抜擢されることになりました。人の目には幸いな歩みに見えても、信仰者として異教の神々を拝む王に仕えなければならないのです。死を覚悟するような出来事に何度か遭遇することになります。

最初の事件は、バビロン王が見た夢のことがきっかけで起きました。誰も夢を解き明かすことができないことから大騒ぎとなり、ダニエルが巻き込まれて死刑を言い渡される。そのときは、神が幻の中でダニエルに王の夢を解き明かしてくださいだったので難を逃れることができました。

次の事件は、王が金の像を造り全国民に向けてこれを拝むように命じたときに起きました。ダニエルの三人の友人シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ（バビロンでの名前）は王の前ではっきりと偶像を拝むことを拒否します。それで王は怒り狂い熱い火の燃える炉の中に投げ込めと命令する。そうしたら不思議なことに王は幻のなかに、三人が神々の子のように見える人と一緒にいるのを見て驚き、すぐに炉のそばに駆け寄って、出て来るように命じると、三人は何の害も受けずに炉の中から出て来ました。これを見た王は、三人が信じる神に対して不敬なことを口にする者は厳しいさばきを受けると、全国民に告げた。これが前回までのあらすじでした。

1 4章の構造

1) 2章の夢と4章の夢

今日の4章に入る前に、二つのことを確認しておかなければなりません。まず一つ目です。ここで王は夢の話をしています。「あれ、前にも同じような話があったのでは？」と思った方がいるはずで、そのとおり。2章です。王は自分の見た夢のことが気になり、国中の学者を呼んで夢の意味を告げるように命じた。でも彼らはできない。それでダニエルが夢を解き明かした。それが2章に出て来た

話でしたが、4章もそれとよく似ていて、私は最初これは2章の繰り返しなのかと思ったくらいです。

しかしよく見ると違うところがある。2章では、王は夢の内容を学者たちにもダニエルにも教えていません。ところが4章8節後半には「私はその夢を彼（ダニエル）に話した」とあって、実際に10節以降で王は夢の内容をダニエルに教えていますし、夢の内容が決定的に違いますので、2章と4章は別の話なのだという結論になります。一つ目のこととしてまずこのことを確認しておきます。

2) 1～3節と34～37節

確認してすべき二つ目のこと。4章2節に「いと高き神」とある。3節にも「その国は永遠にわたる国、その主権は代々限りなく続く」とあります。ここで王が言っている「神」は、どう見ても金の像まで造って拝ませていた自分の神々のことではなく、ダニエルたちが信じている天地を造られた神のことを指しています。ということは王は信仰を告白していることになる。ところが8節に、「彼の名は私の神の名にちなんでベルテシャツアルと呼ばれ」とある。王が本当に信仰者になっているのなら、「私の神の名にちなんで」と言うはずがない。これはいったいどういうことか。

ここで種明かしをします。4章はサンドイッチのような形をしていると思ってください。34節を見てください。そこには「永遠に生きる方を賛美し、ほめたたえた」とあって、1～3節と比べると内容がよく似ている。ということは4章の最初と最後はサンドイッチのパンの部分。それにはさまれた4～33節は具の部分。かつて異教の神々を拝んでいたバビロン王が、どのようにしてダニエルたちが仕える神を信じるようになったか、その証しがこんな形で書いてある。これが二つ目に確認しておくことです。

2 夢を見る王

1) 繁栄を極めたのに真の平安がない

では詳しく見ていきましょう。4、5節。「私ネブカドネツアルが私の家で心安らかに過ごし、私の宮殿で繁栄を極めていたとき、私は一つの夢を見たが、それが私を恐れさせた。私の寝床での、様々な幻想と頭に浮かんだ幻が、私をおびえさせた。」

「宮殿で繁栄を極めていたとき」とあります。この世の地位と権力、家系、富、人が地上で望むもののすべてを手にしていただけですから、さぞかし幸せだろうと思ったら、王は自分が見た夢のことでおびえていた。なんとも皮肉です。どんなに大きな権力があっても、王は夢のことで恐れて、心に平安がない。人間の本当の幸せとは何かを考えさせられます。

2) エゼキエル書31章との類似

王は本当の平安を得たいと願い、ダニエルを呼び、夢の内容を教えます。こんな内容でした。地の中央に生え出た木が生長して天まで届くようになり、木には実が豊かになり、獣も鳥も木の枝の下でくつろいでいる。ところがそこへ聖なる者が天から降りてきて木を切り倒し、残った根株は鉄と青銅の鎖がかけられて野原に放置される。そこへ聖なる者が降りてきて16節でこう語ります。「その心を、人間の心から変えて、獣の心をそれに与え、七つの時をその上に過ぎ行かせよ。」

このあと、ダニエルが夢を解き明かしていきますが、それはまた次回に詳しく見ることにして、きょうはもう少し別の面からこの夢について考えます。

王が見た夢は、かなり特殊でだれもが見るようなものではないと多くの方は感じるはずですが、ところが、これとよく似た記述がエゼキエル書31章に出て来る。エゼキエルはダニエルより少し早い時期にバビロンに補囚として連れて行かれ、バビロンで預言者として活動したと言われます。つまりダニエルとほぼ同時代の人です。そのエゼキエルが31章で、エジプトはレバノン杉のようにそびえ立ち、その丈はどの木よりも高くなると語ったあとでこう語るのです。「それゆえ、神である主はこう言われる。『それが高くそびえ、こずえを雲の中に伸ばし、その高さゆえにおごりたかぶったので、わたしはこれを、諸国の民のうちの力ある者の手に渡した。そのものはこれを厳しく罰し、わたしも、その悪行に応じてこれを追い出した。』（エゼキエル書31章10,11節）

エジプトはやがて倒れる。エゼキエルはそう預言した。だれが倒したか。ネブカドネツアル王です。エジプトと戦ってこれを倒し、バビロン帝国を築きます。彼が、「私の宮殿で繁栄を極めていた」言うのはそのとおりであった。エゼキエル書をあとで読み比べてください。よく似ていることに驚くはずですが。これは偶然ではありません。エジプトがやがて倒れると語った同じイメージを使って、次にバビロン王の身にも同じことが起こる。エジプト

もネブカドネツアル王も、神の前に高ぶる者として倒されていく。そのように神は語っています。

3 神

1) 人間の中で最も低い者をその上に立てる

ネブカドネツアル王は、このようにエジプトを打ち負かし、世界の覇者となってバビロン帝国の王座に就いた人です。当然のことですが、この世で最も力があるものこそが王座に座る権利がある。それが自分であると信じています。

しかし神の視点からご覧になるとまったく話しは変わります。17節後半。「これは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、また人間の中の最も低い者をその上に立てることを、いのちある者たちが知るためである。」

人間の中の最も低い者を支配者として神はお立てになる。ネブカドネツアル王が信じていたこととまったく正反対。もしかして王ががおびえたのは、このことだったのかもしれませんが。というのは、少しでも高ぶるところがあるならば、神は容赦なく王を倒す。そう言われているからです。そして神は必ずそうするだろうという確信があった。王は自分の目で、神がああ三人の若者を燃える火の炉から救いだすのを見てきたからです。

この後のこと先取りして言えば、実際に恐れていたことが起こります。ネブカドネツアル王は、人の心を失って獣の心になり野の獣とともに草を食べるようになります。泥と汚れにまみれ、目をそむけるような姿となって地を這いずり回っていく。そこまで低くされて、初めて彼は神のすばらしさに気がつき、この証しを告白するに至るのです。

2) 最も低くされた方

その、低くされると言うことに関してですが、エゼキエル書31章にこんなことが書かれています。そびえ立つ木が切り倒された後のことです。31章16節。「わたしが彼を穴に下る者たちとともによみに下らせたとき、わたしはその落ちる音で諸国を震えさせた。すると、地下の国では、エデンのあらゆる木、レバノンの選り抜きの良い木、水に潤うすべての木が慰められた。」

エジプトの王ファラオが倒される場面ですが、不思議なことに「彼」という方がよみに下るとき、「レバノンのえり抜きの良い木、水の潤うすべての木が慰められた」とある。たかぶる者をさばいて終わりではない。厳しいさばきの中に、なにか神は救いを用意しておられる。そのように聞こえ

ます。救い主イエス・キリストがいのちをお捨てになり、よみという地の最も低いところにまで下ってくださった方が、私たちの慰めとなる。私にはそのように聞こえます。

3) 神のご計画を知らされるダニエル

19節には、ダニエルが王が語る夢を聞いて驚きすくんだと書かれています。二つ理由があります。夢の本当の意味をそのまま王に告げたなら、王は怒りに燃えて自分を殺すかも知れません。それで動揺する。そしてもう一つはその反対で、神の救いがこのようにして与えられていくのだと、王の夢を通して知らされて驚いています。それまで、ダニエルの目にはずっと見えなかった。でもあるとき、王から夢の話が聞かされて初めて神がいま働いておられるのがわかりました。バビロンに補囚となって連れて来られ、苦難の中で信仰を守らなければならなかったダニエルはどうしていたのでしょうか。王に呼ばれたとき、いのちをかけながら、忠実に職務を果たしています。まるで神に仕えるように、王に仕えています。

私たちはどうでしょうか。コロナのことはまだまだ続くでしょう。そうしたらこの先仕事はどうなるのか。学校はどうなるのか。将来はどうなっていくのか。目で見ても、耳に聞こえてくることも、みな心をおびえさせるものばかりです。

でもそれがすべてなののでしょうか。私たちの神は力がないのでしょうか。コロナことで人が苦しむとき、なにもしようとしないのでしょくか。バビロン王にさえこのように働かれる神であるならば、必ず今も大きな力をもって働いておられる。人となって私たちの間でもっとも低くなられたイエス・キリストが、永遠にわたる国の王となりました。その国へ向かって私たちは一步一步歩を進めています。私たちはいま、本当に力のない者であること、何もできないものであることを告白しながら主の前にへりくだりたいと願います。